

目次

兼好・徒然草関係年表	表紙裏	第二十五段	飛鳥川の淵瀬	100
兼好系図	扉裏	第二十九段	静かに思へば	107
はしがき	六	第三十一段	雪のおもしろうふりたりし朝	109
解	八	第三十五段	手のわるき人の	110
全編通釈	二六	第四十一段	五月五日賀茂の競馬を	111
序	二六	第四十三段	春の暮れつ方	115
第一	二六	第四十五段	公世の二位のせうとに	116
第二	二六	第四十六段	柳原の辺に	120
第三	二六	第四十七段	ある人清水へまゐりけるに	122
第四	二六	第五十一段	龜山殿の御池に	123
第五	二六	第五十二段	仁和寺にある法師	126
第六	二六	第五十三段	これも仁和寺の法師	126
第七	二六	第五十五段	家の造りやうは	128
第十	二六	第五十六段	久しくへだたりて	128
第十一	二六	第五十七段	人の語り出でたる歌物語の	129
第十三	二六	第七十一段	名を聞くより	133
第十四	二六	第七十二段	いやしげなるもの	134
第十五	二六	第七十三段	世に語り伝ふること	134
第十八	二六	第七十七段	世の中はそのころ人の	138
第十九	二六	第七十八段	今様のことども	138
第二十一	二六			138

第七十九段	何事も入り立たぬさま	138
第八十段	人ごととわが身に	138
第八十一段	屏風障子などの	138
第八十七段	下部に酒飲まする事は	138
第八十八段	ある者小野ノ道風の書ける	138
第八十九段	奥山に猫またといふもの	138
第九十二段	ある人弓射る事を習ふに	138
第九十九段	高名の木のぼり	138
第一百十段	双六の上手といひし人に	138
第一百十四段	今出川のおほい殿	138
第一百十六段	寺院の号	138
第一百二十一	養ひ飼ふものには	138
第一百二十八	雅房の大納言は	138
第一百三十七	花は盛りに	138
第一百三十九	家にありたき木は	138
第一百四十	身死して財残る事は	138
第一百四十一	悲田院の堯蓮上人は	138
第一百四十二	心無しと見ゆる者も	138
第一百五十	能をつかんとする人	138
第一百六十七	一道にたづさはる人	138
第一百七十	さしたる事なくて	138
第一百八十四	相模守時頼の母は	138
第一百八十五	城ノ陸奥ノ守泰盛は	138
第一百八十六	吉田と申す馬乗の	138
第一百八十七	よろづの道の人	138
第一百八十八	ある者子を法師になして	138
第一百九十六	徳大寺の故大臣殿	138
第二百七	龜山殿建てられんとて	138
第二百九	人の田を論ずるもの	138
第二百十二	秋の月は	138
第二百十五	平ノ宣時朝臣	138
第二百十六	最明寺ノ入道	138
第二百十九	よき細工は	138
第二百三十一	園の別当入道は	138
第二百三十四	人の物を問ひたるに	138
第二百三十六	丹波に出雲といふ所	138
第二百四十三	八つになりし年	138
京都附近		138
内裏・大内裏		138
裏表紙裏		138

第一 一段

1¹威 1²でや この世に 格 2^{下二用}生まれ 3³ては、 4⁴願はしかる 5⁵べき事 6⁶こそ 7⁷多か 8⁸ンめれ。 御門の 御位^{御位}

9⁹はいとも 10¹⁰かしこし。 11¹¹形夕終 12¹²竹の園生の 13¹³名 14¹⁴末葉まで、 15¹⁵人間 16¹⁶の種ならぬぞ 17¹⁷やんごとなき。 18¹⁸の

19¹⁹人の 御有様^{御有様}は 20²⁰格 21²¹係 22²²さらなり。 23²³ただ人も、 24²⁴舍人^{とがひ}など 25²⁵賜はる 26²⁶格 27²⁷きは 28²⁸係 29²⁹はゆゆしと 30³⁰見ゆ。 31³¹その

32³²子孫^{うま}までは、 33³³係 34³⁴はふれにたれど、 35³⁵副 36³⁶なほ 37³⁷なまめかし。 38³⁸それより 39³⁹下つ方は、 40⁴⁰係 41⁴¹ほどにつけ

42⁴²つ、 43⁴³格 44⁴⁴時にあひ、 45⁴⁵係 46⁴⁶したり顔なるも、 47⁴⁷みづからは 48⁴⁸係 49⁴⁹いみじと思ふらめど、 50⁵⁰いときくち

51⁵¹をし。

【語釈・補説】「いでや」感動詞「いで」に感動助詞「や」がついてできた複合感動詞。イヤモウ・イヤドウモ・ドウモハヤなど訳す。①塚本氏「解釈」に、「いでや、さても。発語の辞で一寸芝居がかりに特に「さ」に力を入れてやや強くいふときの「さて」といふ趣と思へばよい」とあるのをはじめ、この語を積極的感情を伴った発語と解する註書が多

いが、すくなくとも、この解としては、正解ではない。これは、話しはじめにいう発語ではあるが、はりきって言いだすのではなく、消極的、否定的に、ひかえめな気分で言いだすときの、自己否定の歎息である。本居宣長が、「いやもう」と訳した名訳（源氏物語玉の小櫛・五）がそのまま現代語にもあてはまる。イヤモウの下へ、「ナンノカンノト言ッタトコロデイタシカタモナイガ」など、消極的歎息の意味を補ってみるとよい。②感動詞「いで」も「いでや」とほぼ同様の意味に用いられるが、ただちがうのは、「いで」には、何か動作をはじめの際のドリヤなどに当る発語としての用法があることである。この場合には、「いで見ん」（源氏物語・夕顔）・「いでこの直衣着ん」（同・紅葉賀）のように、下に意志を表わす述語をともなつて用いられるから判別ができる。③この世に「こ」は指示代名詞だが、これは、指すものが漠然としていて、他の語と置きかえができない。したがって、代名詞としての自立性が薄弱だから、下の「の」までを含めて「この」を一単語の連体詞とするのがよい。「に」は場所を示す格助詞。④「こ」でも、「大きな柑子の木の……まはり」をきびしくかこひたりしこそ、……この木なからましかばとおぼえしか」（一段）のように、「こ」の指すもの（ココハ柑子）が明らかな場合は、代名詞と連体格助詞との二単語とする。⑤「は」活用語の連用形に接する「て」は、ふつうは接続助詞だが、これは、完了助動詞の強調確認の意味が多分にあるから、完了「つ」の連用とみるのがよい。「は」は、他と區別して強く指示する係助詞。これは、「て」と「は」と結合して一つの複合接続助詞をつくり、何何し（タカラニハ・タ以上ハ・タノチハ・タトイウトニナルトなどの意を表わす。なお訳出の場合、上にイヤシクモ・イッタン・カリニモなど適当な副詞を補うと訳語がいつそうしっくりする。この「この世に生まれては」も、「イヤシクモ人ガ」この世の中に生まれて来た以上は」と訳出すれば適訳である。⑥「こ」ことと同じ「ては」の用法は徒然草中八例ほどある。今要所だけ挙げておく。「故郷の扇を見ては悲しび、病ひにふしては漢の食を願ひ」（八四段）・「かばかりになりては、とびおるともおりなん」（一〇九段）・「残りなく打ち入れんとせんにあひては」（一二六段）・「しきみをゆらりとこゆるを見ては」（一八五段）・「いづかたをも捨てじと心にとりもちては」（一八八段）・「ここに到りては貧富分く所なし」（二一七段）。また「月満ちては欠け」（八三段）のように、相反する動作（満ち・欠け）のあいだにおかれる「ては」もこの